

内服薬による乳癌抗エストロゲン療法における更年期様症状の出現実態について

ホーム調剤薬局 / 山口 久美子 佐久間 玲子 高橋 郁乃
佐藤 妙子 佐藤 尚美 伊勢 由香里
にいがた調剤薬局 / 笹原 まゆみ 渡部 陽子 大石 美也

【はじめに】乳癌に対する抗エストロゲン療法の必要性は、医師から十分に説明を受けているにもかかわらず、副作用に不安をもつ患者は多い。そこで、不安を解消し、治療に積極的に向かい合ってもらうための情報を提供したいと考えた。しかし、副作用の中でも起こりやすいと言われている更年期様症状の発現・消失時期等について、製薬企業はデータ集積をしていなかった。そこで、保険薬局で得る患者情報を解析することで、今後新たに服用を開始する患者に提供できる情報が得られるかどうかを検討した。

【方法】ホーム調剤薬局、にいがた調剤薬局2店舗の計3店舗において、平成14年6月1日から7月31日までの期間にノルバデックスを2ヶ月以上服用している患者計107人を対象に、副作用の出現状況(症状・発現及び消失時期・程度)を患者自身が記入するアンケート方式で行った。

【結果】回答率は97.2%であった。57%の人が副作用を経験したと感じており、更年期様の副作用の発現頻度は、若い年代ほど高い傾向がみられた。症状別発現頻度は「ほてり」33.7%、「発汗」31.7%、「肥満」21.5%、「おりものの増加」19.2%であった。また、発現した症状によって副作用発現時期に差があった。消化器症状、循環器症状は比較的早く発現し、肥満や皮膚の衰えは長期間してから発現することが多い。服用中、副作用は継続することが多いが、副作用に対する主観的評価は中程度以下で我慢できると答えた人が約80%と多かった。

【考察】 回答率の高さから、副作用に対する関心の高さが感じられ、その解析から患者は副作用でQOLが低下しながらも乳癌と向かい合っていることがわかった。約60%が副作用を経験したと感じており、これはインタビューフォームに記載されている発現頻度に比べ非常に高い。このことから、副作用情報を十分に医師、薬剤師が収集しているとは言えないことが推察された。薬剤師が癌という患者背景に戸惑い、情報収集への取り組みが不足していたと痛感した。私達が知りたいと思っていた副作用の出現実態の傾向は読み取れた。保険薬局の副作用情報の収集・解析機関としての可能性が示唆され、個々の患者のイベントを薬剤の評価情報として活用していくことへの取り組みも必要だと考える。

【アンケート後の取り組み】患者向けの集計結果を作成するにあたり医師と連携したことで、患者の混乱や不信を回避することができた。また、この集計結果が、アンケートに協力して頂いた患者のみならず、同じ薬剤を服用している他の患者への情報提供にも生かされたことは非常に有意義であった。医師と保険薬局との関係は、私達の認識が変われば転換していくことを実感し、今後も医薬連携を深め、患者の積極的な治療への参加をサポートしていきたい。

